

「全世界を人口100人の村にしたら」

もしも今日がついていない一日だと感じたあなたも
これを読んだら現実が違って見えるかもしれません
もし現在の人類統計比率をきっちり盛り込んで
全世界を人口100人の村に縮小するとしたら

その村には…

57人のアジア人

21人のヨーロッパ人

14人の南北アメリカ人

8人のアフリカ人

52人が女性

48人が男性

70人が有色人種

30人が白人

70人がキリスト教徒以外

30人がキリスト教徒

89人が異性愛者

11人が同性愛者

6人が世界全体の富の59パーセントを所有し

その6人ともがアメリカ合衆国国籍

80人が標準以下の居住環境に住み

70人は文字が読めず

50人は栄養失調

ひとり死にかかり、ひとはもうじぎ生まれ

ひとり(そう、たったひとり)は大学での教育を受け

ひとりがコンピューターを所有している。

もしこのように縮小された全体図から私たちの世界を見るならば、
いかに相手を受け容れること、理解すること
そして教育が必要かは火を見るより明らかです。

月田秀子の昨日、今日、明日…

「ああ、リスボンまで飛んできてよかった。」来るまでの不安は、マリオ・パシェコのポルトガルギターの音色を聞いて、大きな喜びに変わった。

一回目の音合わせで、圭ちゃんの弾くギターに誘われるように弾きだしたマリオのポルトガルギターは、テージュ河のきらめきを思い起こさせた。まさに大河の一滴だ。ポルトガルギターのマリオ、ギターの圭ちゃん、歌うわたし、三人の鬼気迫るような熱気に、同行した音響の今井氏は、かける言葉を失ってしまったという。

今井氏がその模様を撮ったビデオを見て、わたしたち三人は唖然としてしまった。画面が小刻みに震えているのは今井氏の興奮ゆえか、そこに映し出されているのは、共に波のように戯れ揺れている三人のミュージシャンの姿だった。素晴らしいものが生まれる確かな予感を、その時わたし達は感じた。そして、その予感に違わず、奇跡に近い完璧さをもって、録音は終了した。一番大きな問題は、わたしの歌である。臨場感はあるものの、CDとして聴くには堪えられない代物である。それはそれとして、マリオのポルトガルギターは、絶品だ。なんとしても、日本に呼んで一緒にコンサートをしたいと思っている。来年に希望をつないでいる。

ポルトガルでのレコーディングを終え、7月23日、リスボンの空港を立ちチューリップに向かった。幸いチューリップからは、エコノミーからビジネスクラスに昇格した。そんなわけで、大阪行き便待ちの3時間近くを、ビジネスクラス客向けのスモーキングバーで、過ごす事になった。

シングルモルト"OBAN"をちびちび飲みながら、リスボンでの感動的なレコーディングに思いを馳せた。女性ヴォーカルの物憂いジャズが疲れた体に心地よく響いた。私にはこんなに囁くようには歌えない。声を張り上げるばかりが歌ではない。歌には声にならない声も必要だ。状況に左右されない強い意志、想像力、そして状況を的確につかむ洞察力。私自身ももっと大きく深くなければ歌えない歌、それが「大河の一滴」だ。「ヴォーカルだけ、日本で録音しなそう。」三杯目の"OBAN"を飲みながら心に決めた。だけど、人はそう簡単に変わるものではない。深紅の薔薇が、一瞬にして色褪せるように、感情は瞬時に変わるけど…。話す人もないソバーのカウンターで、饒舌になり損ねた私は、コースターに書き連ねた。「わたしの目は、空を見る。遠い空のかなたを見る。わたしの目は、海を見る。深い海の底を見る。わたしの目は見る。褐色の大地を見る。大地の底に流れる水の音を聞く。私の目は見る。人を見る。いつの日か消えてゆく命の炎の悲しいほどのまばゆさを見る。」その日は、黒田清さんの一周忌だった。

「月田さん、あと2時間で閑空ですよ。」アルコールの残った頭の隅で聞こえた圭ちゃんの声で、目を覚ました。機内に乗り込み、夕飯のメニューをにらみながら、メインディッシュに、まとう鯛。ポルドー、ブルゴーニュ2種類ずつの赤と白のワイン。食後は、スイス産のチーズとカルバドス。そう決めたままでは憶えているのだが、どうも、いずれも口に入れた記憶がない。「ねえ、圭ちゃん、わたし、まとう鯛食べた?」圭ちゃん、笑いながら答えて曰く、「ちゃんと食べましたよ。

多いからって、半分僕にくれて、それから、ワインを赤白2種類ずつ4つも並べて、最後は、カルバドスのグラスをしっかりと握り締めたままお休みでしたけどね。」同行した音響の今井氏も笑いをこらえきれない眼でわたしを見た。疲れも手伝って、どうやら、バーで飲みすぎたようだ。

帰国して、翌々日から、京都、静岡、東京、神奈川、そして大阪での連日のライブをこなした。疲れたなんて言っている暇はなく、次の日は、五木先生に送るためのデモテープ作り。夜は三裕の館でのライブ。我ながら、強靱な体力に驚いた。ただ一つ素晴らしい財産を与えてくれた両親に心から感謝した。

8月の末は、くそ暑い大阪とおさらばして、北海道でのライブ。北海道ファドファンクラブの千田マネージャーの計らいだ。あいにく晴れた日は一度もなかったが、何よりも、心身ともにリフレッシュさせてもらった。札幌で2箇所、苫小牧、洞爺湖は、30名から80名の小さなライブ。ギター持参で、圭ちゃんに助けてもらいながら、「ツクマンの月」、「人生よありがとう」などの南米のフォルクローレも歌った。大自然を前にすると、ファドではないそんな歌を、むしように歌いたくなる。

響きのいい所での生音でのライブは、こたえられない。「やはり、ファドは、小さい所で熱く聞くのが最高ですな。」そんな声に、異論はないのだけど、「もう、大会場では聴きたくありませんな。」とまで言われると、「おいおい、ちょっと待っておくんさい。」と、動員の苦しさを思いながら、大きな所でも、それなりの楽しみがあることを力説する月田であります。

そんなわけで、今年の年末の大阪、名古屋、東京での三都公演は、「大河の一滴」をテーマに、一曲一曲にこめられた命の一滴を表現したく思っています。それらを求めてわたしの心は、ポルトガルにとどまらず、イタリア、ギリシャ、アルゼンチンまで飛んでゆきそうです。

函館の「若松旅館」でのコンサートに、アルメイダ在日ポルトガル大使がご来場くださった。その打ち上げ会場での1コマ。「ところで、月田さんのポルトガル語はどんなのですか?」との質問に、大使閣下答えて曰く。「彼女は、ポルトガル語を心で話す(Ela fala Português com alma.)」思いがけないその一言を、ありがとうと何度も繰り返しながら私は手帳に書きとめた。(最近とみに物覚えが悪くなった月田です。)

同じようなシーンを思い出した。リスボンのとあるファドレストランを訪れたファンの一人在、そこで歌っていた一人の男性ファド歌手に尋ねたそうだ。「月田秀子を知っているか?」彼の答えはこうだった。「私は、彼女の歌が好きだ。そして、彼女の精神を愛している。」

「先生、つくづく思うんですけど、私って本当に歌が下手になって。なのに何故、私を使ってくださいるんですか?」五木さん答えて曰く、「歌の上手い人はいくらでもいるよ。大切なのは人の心に残る歌が歌えるかってことなんだよ。」私は、そんな力がどうして私の声に、心に、存在に、あるのかわからない。でも、理屈なしに、そんな歌を歌ってゆけたらと心の底から願っている。

biografia

AMÁLIA

一ヴァイトール・パヴァオン・ドス・サントスに語った自伝③

訳:松田美緒

いまだによく覚えているが、ある叔父は70歳になっても絶対に祖父母の前でタバコを吸わなかった。祖母は一番上の息子を14歳の時に産んだから、彼が70歳ならその頃84歳だったはずだ。祖母は93歳の時、持病で亡くなった。祖父も亡くなったのは93歳で、祖母とは2歳違いだった。ふたりとも規則にとてもしゃだしい人だった。祖母はアルカリア、祖父はソウト・ダ・カーザ村の生まれ。たくさんの子供たちを育て上げ、二人とも随分の年寄りだったので、孫がもらうべき愛情を私にくれる余裕はなかった。祖父についてはいい思い出はある。しかし祖母はというと、私をローブやベルトで打ったりするほどひどくないにせよ、思い返してみれば、いつでも険しい人だった。私を好いていてくれると思ったのは一回だけ。近所のおばさんが、ケーキアーモンド菓子を買って、自分の子供たちにはやるが、私にはくれなかった時があった。そのおばさんに腹を立てたのか、よだれが止まらない私を見て可哀想になったのかは知らないが、その場で私にお金をくれ、買いに行かせてくれた。それが、この祖母アナ・ド・ロザリオ・ベントが愛情を見せてくれた、ただ一つの思い出だ。

幼い頃はいつも家の引っ越しをした。マルティン・ヴァス通りで生まれ、サント・アマールに引っ越し、それからロジャ波止場に移った。ここではあのロジャ通りの小さな階段のすぐ横のとても小さな家の2階に住んだ。この家には、近くの工場の合図の笛が鳴るたびに恐ろしくて逃げ込んだものだ。その後、パティオ・ドス・キンターリヨスに移り、それからまた同じ地区にある別の家に引っ越した。母と暮らし始めた頃の暮らしはひどく貧しかったので、祖父母も一緒だった。いつも引っ越し、引っ越し。理由の一つは蒸し暑かったこと。もう一つは街角であったためだ。ある家は小さすぎて家具を売り、次のは大きすぎるので家具を買い、そのうち蒸し風呂になるか、まだ大きすぎるか。決して一つの場所に留まることはなかった。

カルサーダ・ドリヴラメントに住んでいた頃、まだ一緒に住んでいた祖父はうちに暖房がないせいで一年中冷え性だった。ある時のこと、彼は私をからかおうと、まだほんの子供の私にプリオール・ド・クラト通りにある薬局に「五月晴れ」というものを探しに行かせた。店の中に入って、槍を持った男の形をしたランプを見つけ、それを引っ張ってみると、ピビッというショックを感じた。驚いた私は、「薬局の叔父さんに嫌われてる!」とわあわあ泣きながら家に逃げ帰った。家に電気がなかったので、電気ショックについて何も知らなかったのだ。事情が飲み込めないで、全ての元凶はあの意地悪な薬局の男になった。余りに怖いものだから、二度とそこには近付かなかった。

クリスマスにもらったおもちゃはブリキでできたお鍋セットだった。ある時、近所のおばさんが、私の背丈ほどもあるセルロイド製のマネキン人形をくれた。毛糸のパンツとセーターを着ていた。大喜びの私は近所中の子供たちの視線を集めながら、その人形を連れて自慢げに歩きまわったものだ。

おもちゃは持っていなかったが、祖母の話によると私は3、4歳の頃からもうすでにスモックのポケットを飴やコインでいっぱいにして帰って来ていたそうだ。バラードを二つ、三つ知っていたので、周りの人は何かくれた後に歌の注文をするのだ。そんなに小さい時から、一日中歌ってばかりいた。祖母は、そんな私を静かにさせようとしてはぶつぶつ言った。「歌にある才能の分だけ勉強ができたらねえ」。それなのに近所の人の前では、「うちのアマリアは歌が上手いのよ」と話し、私を呼んでは、言いつけた。「アマリア、そこでお歌い」。そんな時は決まってもなにも歌えなかった。少し後になっても同じことがあった。母が20エスクードくれるから、と叔母の家に歌いに行かせた時の話だ。叔母の家に着き、観客を見回すだけで、頼まれた歌を歌えないまま家に帰った。そんな時はいらいらした。稼いだお金は、母が夕食の買い物をするのに必要だったとわかっていたから。

私を自由に歌わせることができたのは、祖父たった一人だった。彼は、私に背中を向けて窓辺にすわる。私は、家の中からオウムのように聞いては覚えたカルロス・ガルデルのタンゴやほかの歌を次々に歌った。すると通りに行く人々は、その声がどこから来るのか、確かめようと立ち止まる。私が黙ると、祖父はさも嬉しそうにいうのだった。「次はあれを歌いな、あの歌だ。ごらん、もう6人も立ち止まったよ」祖父が私に背を向けていたから、私はいくらでも歌い続けられた。

どんな歌でも歌っていた!盲目の歌人たちが歌うのを聞いて学んだ。私が貯金箱を持っていたので、いつも何か入れてくれる叔父やおばかいた。貯金箱を振って5スタオンほど取り出し、それでバラードの歌詞集を買ってはすべて暗記した。10歳の頃だったが、歌には歌詞を付けて歌い、一語も変えたりしなかった。私の頭の中には、それぞれの内容がどういふふうに関われるべきなのか、というイメージがきちんとあった。ある時、シコおじさんの家へ行った。彼はラジオを持っていたのだが、あの当時、ラジオを持っている人といえば王様同然だった。そこで、ちょうどその頃の流行歌の中のこんな節が聞こえた。「母さん、黒人と踊りたいの」ほかはわからなかったが、その節だけ頭に残り、いつも歌うようになった。ただその節だけだ。時々、ある通りに入ると、蓄音機からその頃話題になっていたファディスタ、マリア・アリスやエルシリア・コスタのファドが流れてきた。いろいろあった中でも、一番たくさんの歌を覚えた場所は、映画館だった。私はとても若かったが、月二回は10スタオンほど払って栈敷席をとり、海岸沿いの映画館、アルカンターラ劇場、エデン、プロモトーラなどに足繁く通った。カルロス・ガルデルの映画を見ては、そこにでてくるタンゴの曲をすべて覚えた。「場末のメロディー (Melodia De Arrabal)」や「我が愛しのブエノス・アイレス (Mi Buenos Aires Querido)」などがあるが、中でも一番好きだったのが「夜の沈黙 (Silencio en la Noche)」だった。歌詞の意味を知らないまま歌っていたが、ポルトガル語に似た言葉があるとそれを手掛かりに理解した。歌いながら、自分の歌を聴くのが好きだった。その頃9歳で、祖母が近所の人にアマリアは刺繍が上手だと誉めていた頃だった。私は腕を伸ばし、糸をびんと引っ張り、まるで舞台女優気取りで刺繍した。タンゴを歌うことは、ある発見だった。私の声の発見。私は歌いながら、自分から出てくるものが愛しくてたまらなかった。

ficção

読切連載
秀子のエピソード帖
内間 天馬

リン…「ハイ、月田です。ただいま居留守を使っていますので、ご用の方はピーッと鳴りましたら…」ナ、ナダ、こ、これは?! 居留守の留守電なんて…。ウワサは やっぱり本当だったんだ。最近パソコンに熱中している月田さん、居留守を使うほどハマっているなんて。で、彼女にパソコンの個人教授をしている小林先生に同行させていただいた。さすが小林先生、テキパキと要領よく指導される。先生、生徒としての月田さんはいかがですか? 僕の質問をさえぎるように月田さんの質問が飛ぶ「先生! ダブルクイックって何?」クイックじゃないの、クリック!

月田さんが使っているのはノート型パソコンですね。「IBMのシンクタンクって言うモデルよ」。シンクパッドじゃなかったかなあ…。小林先生、このモデルは先生のお薦めなんですか? 「このモデルはキイのタッチが良く出来ているんです。こういう点はカタログなどに数値として表れないけど、長時間入力していると能率に大いに影響してきます」どうりで月田さん、ピアノを弾くようにルンルンでキイを叩いている。僕も同感です。英文も日本語も大量に入力

する僕にとって、キイのタッチも重要な性能の一つです。「先生! 入力するのは人間です。お腹がすいては人間としての性能が劣ってきます。で、焼肉を食べに行きましょう。今日の授業料は焼き肉よ!」いや、ごもっとも、というわけで焼き肉店へ。

焼肉店の技術の進歩もたいしたもの。七輪の煙でモウモウと…ってのは昔の話で、今や無煙ロースターで衣服にニオイがつかない時代なんですね。月田さんはニオイが気になるほうですか? 「自分のニオイってもん持ちたいと思うようになったんだけど、なかか好みの香水が見つからないんだ。」歳をとると、いわゆる老人臭が出てくるようですが。小林先生は如何ですか? 「僕、ワキが臭う?」と先生いきなりシャツをめくり上げる。「私はどうかしら?」と、月田さんもブラウスの袖をたくし上げようとするのを思わず押しとどめる。小林さんも月田さんもぜんぜん臭わないですよ。僕が下駄を愛用しているのは、木にタッチすることによって足の裏に森林浴をさせようってわけです。すごくさわやかな話でしょ? 月田さん、僕の足の裏見てみます? 「ワッ、(顔をそむけて)とてもさわやかとは言えないわね。ところで口臭はどうかしら」3人いっせいに顔を寄せてハーツと息を吐く。「どうやら、私たち、体臭も口臭も大丈夫みたいね。ね、マスター」店主「…」アッ、さっきおかわりしたばかりのキムチ、もうなくなっちゃった。「すいませーん、マスター! キムチおかわりね、大盛りでお願いね!」

fados canções

探し求めて

訳詞: Caldo Verde

巡り歩いたものだ 大地 海原 蒼空を

己の内も外も 闇も光も

いったい何を探していたのだろう

心いつわり 笑みさえ浮かべて

花園を通れば しばしたたずみ

さし出された花には 口づけもした

けれど私の求める花はなかった

私の求める花はなかった

いったい何を探していたのだろう

心いつわり 笑みさえ浮かべて

幾筋の道をさまよったことか

耐えがたいほどの道を

そして真実の日は訪れた

今や何もかもゆだねている

傷だらけで疲れきってはいるけれど

ついにあなたの腕に抱かれています

PROCURA

Letra: A. de Sousa
Musica: Alain Oulman

Corria a terra e mar, o céu azul

Dentro e fora de mim, de noite a sul

O que buscava assim, não sabia

Pedia-me mentiras e sorria

Se passava entre flores ali ficava

E beijos que me vissem emprestava

Mas nenhuma das flores era a flôr

E nenhum dos amores era o amor

O que buscava assim não sabia

Pedia-me mentiras e sorria

Quantos caminhos andados e perdidos

Nos caminhos mortais dos meus sentidos

E um dia de verdade veio a mim

E agora já me dou princípio e fim

Sou toda cicatrizes e cansaços

Mas tenho enfim o abraço dos teus braços

「風」を感じた静岡ライブ 静岡／小嶋良之

神道の世界に「荒魂」(あらたま)と「和魂」(にぎたま)という言葉がある。天変地異やたたりを起す荒ぶる魂。生きる喜びや、愛する素晴らしさ、祈りの大切さを司る和す魂。その二つの魂がひとつの織物となっているファド。その一織り一織りに、喜怒哀楽が、祈りが詰まっている。そんな事を感じさせられた静岡ライブだった。

「風」が吹いていた。それは、3日前まで月田秀子が居たポルトガルの風だった。月田秀子の魂は、まだ、あのアルファマの路地の石畳に居た。言霊の世界では、言葉の一言一音の中に、この世を創生するパワーがあるとす。月田秀子から発せられる声には、言霊が宿っていた。ストレートにその想いが三半規管を通じて、身体にバイブレーションしてくる。意味はわからなくても、その想いは、確実に聞く者の魂の扉を叩いている。時折見せる瞳の中の涙の意味が、声に乗って伝わってくる。

歌詞の意味や背景を説明する秀子節にも、ますます磨きがかかる。語りの世界だけでもライブをしてほしいと思うほどだ。月田秀子のライブにこの語りの部分は欠かせない。もはや、完全に歌と一体になっていて、初めて聞くものには、道案内となり、何度も聞くものには、新たな深みのある道をしめしてくれる。

テーブルの上に置かれたポルトガルの風景写真たちに語り掛けるように、月田秀子の眼差しが電波となって流れてくる。時折、マイクを大きく離れた時に生身の「月田秀子」が声とともに伝わってくる。直接届く声の波長は、その音量とは関係なく、何故かビリビリと身体を震わせる。身体が聴いているのだ。

もう一つ、赤ワインはギター同様、月田秀子のライブになくしてはならない必需品だ。今回のライブでも三度ほどワインを飲む場面があった。下唇に傷があって「沁みる」といいながらも一気にワインを飲み干す。この素顔の月田秀子の魅力もまた、月田ファンには、堪えられない。

秀子さん、野上さん、池側さん、素晴らしいライブを有り難う。

cartas

●7月29日の川合邸でのコンサート、ステキな時間を思う存分過ごさせていただきましてありがとうございました。

久々に聴く月田さんの歌声だったのですが、以前にも増して深みのあるつややかなお声になりましたよね。そしてお会いするたびに美しくなられるし…、いったい月田さんでどれだけ未知なる魅力を隠し持っているんだろう…!50歳を過ぎて(年齢を問題にするのは無意味なことですが)聴くものにこれだけの期待を持たせるなんて…などとナマイキな感慨に浸ってしまいました。

ナマイキと言えば、コンサートの後の歓談会の際、お酒の酔いにまかせ、月田さんに「月田さんのコンサートって、聴き手がお上品すぎるし、もっと不健全なガチャガチャした場所で、泣いたり笑ったりしながら月田さんの歌を味わいたい」なんて、言っちゃったんです。大らかな月田さんは、笑って聞いてくれましたが、「でもね、それじゃあ、食っていけないのよね」とポツリ。

確かに…あなたは趣味やボランティアで歌っているわけではないのですよね。それに、いつもご苦労の上コンサートを企画してくださっている斎藤さん達にもなんて失礼なことを考えていたんだろう、って少し反省。

でもでも、願わくば、もっとファド(他のマイナーな音楽も含め)を楽しむ人が増え、いろんな形で楽しめる機会ができれば…って思うんです!そのために私たちがができることって、口コミでファドのよさを広めるくらいしかないのですが。

今回川合さんのお家で、普段接することの無い世界の方々の中に入り、同じ時間を共有できたことはちょっとした収穫でした。

何しろ超シャイで人見知りな私たちは、人から入る情報量がとっても乏しいのです。皆さんが気軽に声を掛けてくださり、少しだけ世界が広がった気がしています。

ファドに限らず、ココロを豊かにする情報がありましたら教えてください。私たちも渋くて味のある大人になるために、感性が鈍らないよう努めたいと思います。

(横浜・某女史)

●涼すぎる北海道です。夏はやはりうだるような暑さを通過してこそ、秋のさわやかさをよりいっそう感じるのだと思います。

数年前、シアターアプルでのコンサートを拝聴、ああ日本の方のファドもいいなと感じました。

十勝の大樹浜より根室まで道東300キロの太平洋海岸線に乱立する荒廃したトーチカをモチーフに絵を描く者、あなたの音(うた)は、カンバスの四隅を大切にせずにはおかないという制約を与えてくれます。それは何故だろうかと考えます。絵画する行為に向かう前に月田氏の洗礼を受けてからアトリエに出かけますよ。〈「えいっ」と言う気合と勇気〉をいただいております。

(北海道・戸田寿恵)

〈註〉トーチカ:コンクリートで堅固に構築して、内に銃火砲などを備えた防御陣地。(広辞苑より) 戸田さんが描いているのは、第二次大戦中につくられたもの。時の流れの中で朽ちてゆくトーチカは、戸田さんにとって、過ぎ去ったものに想いをめぐらせ、自分を見つめるきっかけを与えてくれるものだという。一言で表しきれない…想い。

informação

- アマリア・ロドリゲスの棺は、7月に、プラゼーレス墓地から、サンタ・エングラシア教会へ移されました。ヴァスコ・ダ・ガマ、エンリケ航海王子など、歴代の人物とともに、冷たい大理石の棺の中に、眠っています。
- 急遽、前進座の芝居で歌うことになり、10月3日の「三裕の館」での定例ライブを中止する事になりました。前進座70周年記念公演のために五木寛之さんが書き下ろされた「旅の終わりに」という芝居です。私の役どころはまだ不明ですが、名古屋公演では、大川栄作さんが、演じられた役らしいです。それぞれの公演で、さまざまな歌手が出演する事になっているようですが、どうなる事やら…。
- 7月の「大阪ブルーノート」でのライブビデオ製作中です。(収録曲:ユニコーン、私の苦いアーモンド、孤独、なにげないファド、プレリュードのサンバ、感謝の歌、サウダーデの風、YESTERDAY、お聞きくださいワイン殿、青い海、難船、孤独な女の独り言、汽車は八時に出る、私のファド、JOHNNY GUITAR、生きてりゃいいさ)なにぶん手作りですので、画質は余り良くはありませんが、「気まぐれライブ」の雰囲気は伝わってきます。ご希望の方は、水谷さん(06-6658-5501)までお電話でお問い合わせください。
- 「大河の一滴」のCD制作が、ポルトガル録音を終えた状態で遅々として進んでいません。映画を当てこんでのものでもなし、一生かけて歌いこんでゆきたいと思っています。五木寛之さんの“他力の風”に吹かれながら…。
- 11月28日には、世界文化社創立55周年記念謝恩企画、「五木寛之さんを迎えての“イタリアの夕べ”」に出演します。ファドをまじえてカンツォーネも歌うことになりました。新たな挑戦と意気込んでいます。その成果は、年末の三都公演で、発揮したいと思っています。
- 11月恒例になった小諸ユースホステルでのライブに加え、去年に引き続き松本、そして、久しぶりに恵那ファドクラブの尽力で、恵那でのライブも決まりました。各地でのファンの皆様の声援をしっかりと受け止め、2001年を終えたいと思っています。

<月田秀子のスケジュール>

10月	3日(水)	東京・新国立劇場「前進座公演・旅の終わりに」夜の部	*問合せ :0422-49-2811
	4日(木)	同上 昼の部・夜の部	
	6日(土)	北海道・室蘭「日航記念病院」	*問合せ :090-8279-5776(三原)
	11日(木)	大阪・南森町「フラミンゴ」	*問合せ :06-6881-2635
	22日(月)	福井・「フェニックス・プラザ」<スミセイライブミュージアム・生きる>	*問合せ :06-6311-0628
	25日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ :075-361-3535
	29日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ :06-6212-2870
11月	7日(水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ :06-6304-1745
	8日(木)	岐阜・恵那	*問合せ :0573-47-2915(繁澤)
	9日(金)	長野・松本	*問合せ :0263-34-8969(宮坂)
	10日(土)	長野・小諸「小諸ユースホステル」	*問合せ :0267-23-5732
	13日(火)	金沢「第三回泉鏡花フェスティバル」	
	16日(金)	徳島「プリンスホテルディナーショー」	*問合せ :0886-55-7336(佐野)
	18日(日)	奈良・王子「やわらぎ会館」	*問合せ :0745-72-8585
	24日(土)	広島・尾道「レストラン北山」	*問合せ :0848-37-1991
	25日(日)	広島・広島「ムシカ」	*問合せ :0829-36-6330
	26日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ :06-6212-2870
	28日(水)	東京・帝国ホテル「イタリアの夕べ」	*問合せ :03-3262-5451(家庭画報)
	29日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ :075-361-3535
12月	8日(土)	大阪・桜橋「サンケイホール」	*問合せ :06-6345-5062
		『TSUQUIDA HIDEKO CONCERTO 2001』	
	11日(火)	名古屋「電気文化会館」	*問合せ :052-332-5820(水谷)
		『TSUQUIDA HIDEKO CONCERTO 2001』	
	16日(日)	東京・銀座「博品館劇場」	*問合せ :06-6345-5062
		『TSUQUIDA HIDEKO CONCERTO 2001』	
	24日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」 —ほろ酔いスペシャルライブ	*問合せ :06-6212-2870
	27日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ :075-361-3535

<編集後記>

戦争という怪物が横行し、もろくも崩れ去る平和。自由はアメリカだけのためにあるのか?秋風が薄ら寒く吹く。わたしに何ができるのか?澄んだ秋空の下に広がる海は塩辛さを増す。私は、パソコンの前に座りつづける。(月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ

<http://www.asahi-net.or.jp/~wc3k-smz/FADO/index.html>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第32号
- 2001年10月1日発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543-0023 大阪市天王寺区味原町2-10-502
- TEL&FAX 06-6765-4808